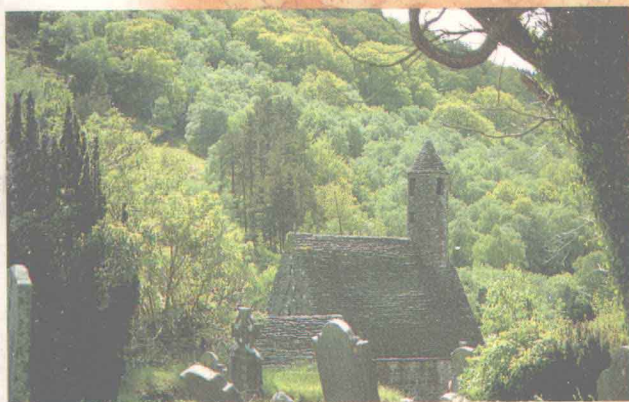


Quatre Saisons de l'Europe

# ヨーロッパの四季Ⅱ

饗庭孝男 文と写真



東京書籍



●同じ著者によって

『石と光の思想—ヨーロッパで考えたこと—』(勁草書房)

『自然・制度・想像力』(小沢書店)

『幻想の伝統—世紀末象徴主義—』(筑摩書房)

『中世の〈光〉—ロマネスクの建築と精神—』(青土社)

『ヨーロッパ中世の旅』(グラフィック社)

『西欧と愛』(小沢書店)

『恩寵の音楽』(音楽之友社)

『ヨーロッパとは何か』(小沢書店)

『幻想の都市—ヨーロッパ文化の象徴的空間—』(新潮社)

『批評と表現—近代日本文学の「私」—』(文藝春秋)

『経験と超越—日本近代の思考—』(小沢書店)

『小林秀雄とその時代』(文藝春秋)

『喚起する織物—私小説と日本の心性—』(小沢書店)

『日本近代の世紀末』(文藝春秋)

他多数

●現在 文芸評論家、甲南女子大学文学部教授 フランス文学、美術専攻

## ヨーロッパの四季 I

1992年11月8日 第1刷発行

文と写真

饗庭孝男

発行者

小高民雄

発行所

東京書籍株式会社

東京都台東区台東1-5-18 〒110

営業03・3942・4111／編集03・3942・4173

印刷・製本

東京書籍印刷株式会社

©Takao Aeba 1992. Printed in Japan

乱丁・落丁の場合はお取替いたします。

ISBN4-487-79093-X C0098

NDC901.4

# ヨーロッパの四季

I



目次

二

地中海のほとり

カプリの〈夢〉

8

シチリアの文化

1  
6

ウンブリアの春

フェレンティルロの谷間

3  
2

スポレートの夾竹桃

3  
8

ペルージャの夕映え

4  
4

トスカーナの〈花〉

ポッティチェルリの〈春〉

5  
0

フィレンツェの〈内省〉

5  
4

ロンバルディアの野

ミラノの小さな美術館

6  
2

コモ、山上の教会

6  
8

オレジオの〈動物誌〉

7  
4

美しい快樂の都市

80

トルチェルロの〈孤独〉

90

ヒエモンテの秋

晩夏のリグリア

96

トリノの霧

100

アオスタの初秋

105



イタリアの宿

110

三

アルプスの下で

シオンの城

118

雪のサン・モリッツ

121

バーゼルの「世紀末」

126

チューリッヒ湖畔で

133

リルケと〈薔薇〉

138

ゲルマンの旅

ハイデルベルクの森 146

ミュンヘンの「世紀末」 153

ライン河の町々 161

リューベックとトーマス・マン 166

フランドルからネーデルランドへ

ブリュージュの白鳥 174

ブリュッセルの「アール・ヌーヴオー」 180

フェルメールを求めて 185

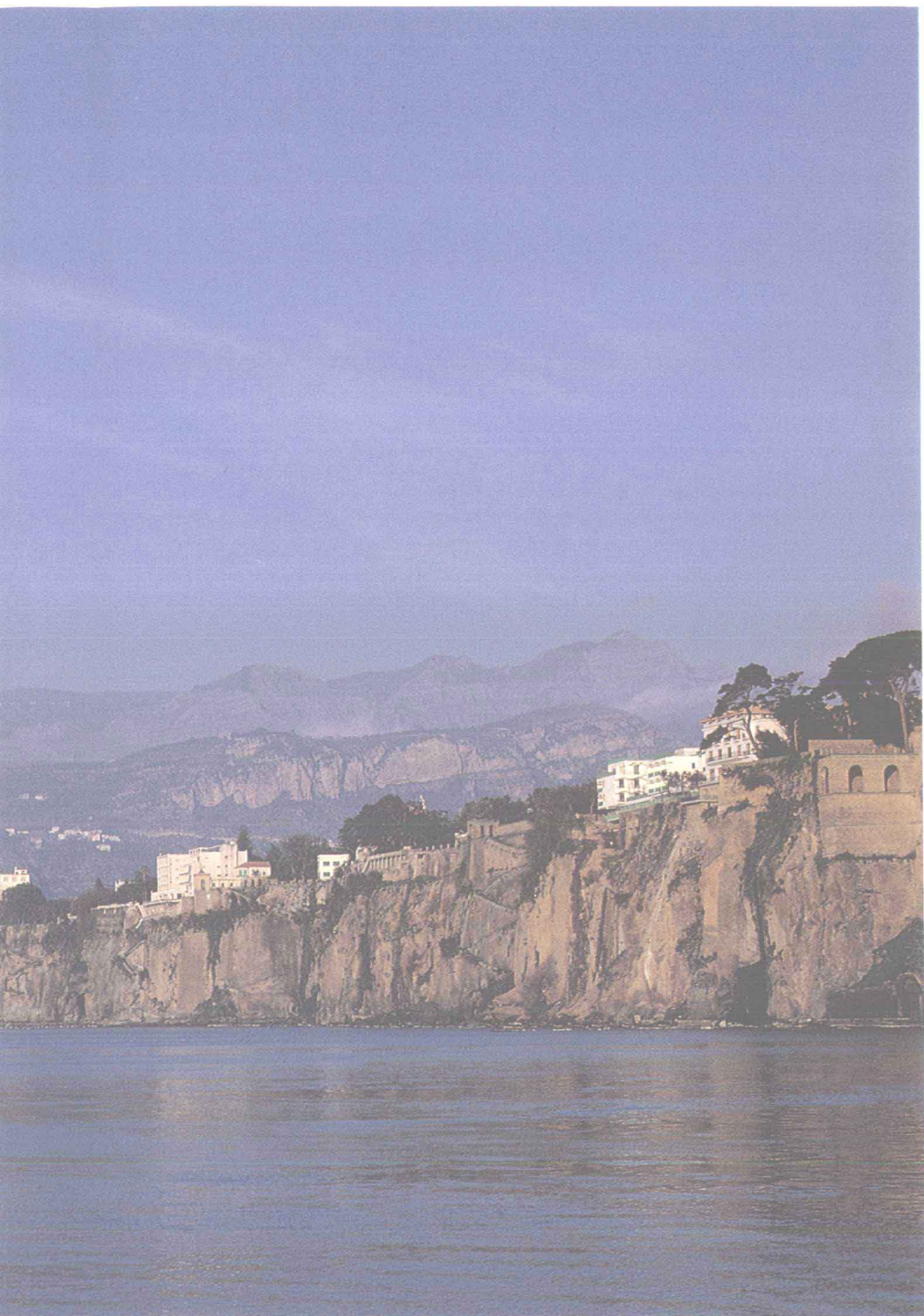
オーフスの原生林と海 191

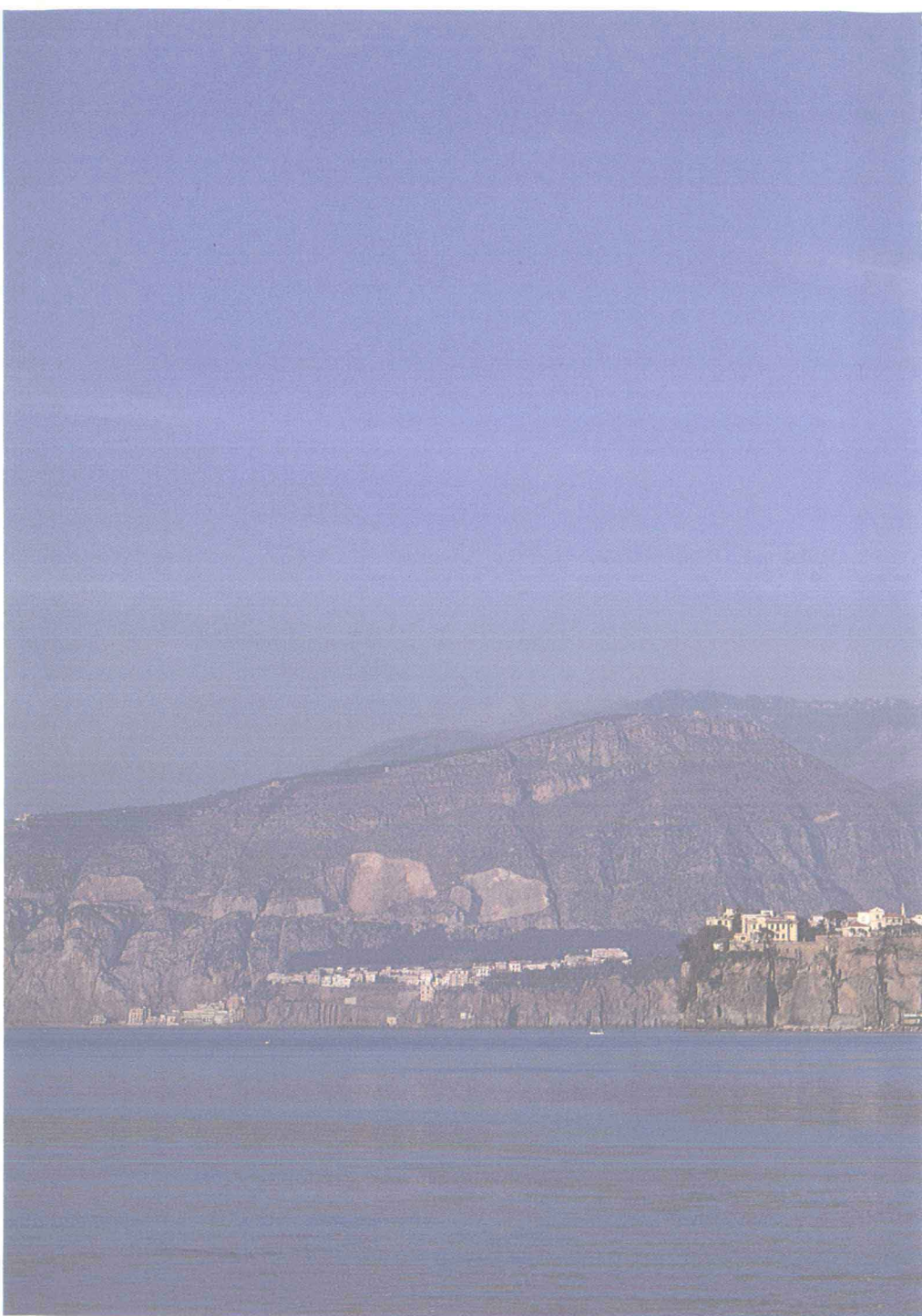
●あとかき 196

●地図 198

# ヨーロッパの四季

## I





## カプリの〈夢〉

パリからナポリへ行つた。春の復活祭のときであつたが、思いのほか静かであつた。少し前まで氣候が寒すぎたせいもあるからであらう。ナポリの国立美術館を見たあと、夕方、サンタルチアの海岸へ出た。月曜日ということもあつて人気少ない小さな料理店へ入つた。空には星がかがやきはじめていたが、上の方には淡く雲が残つていて、それを薔薇色の夕べの光が染めていた。海に近いあたりはもう闇が浸していた。遙か遠くの海岸線に町の明りが明滅し、それを越えてヴェスヴィオ火山が暮れのこつた空に白く美しい姿を見せているのであつた。

それを眺めていると、少ない客の間をまわつてきた流しの歌手が私の所へやつて来て何を歌いましようか、ときく。「遙かなるサンタルチア」をと答えると、大きくうなづいて彼はすばらしいテノールで情感をこめ、朗々と歌いはじめた。それは開けたてのさわやかな葡萄酒のような感じがした。ナポリの町も昼間は喧騒にみち、うっかりと狭い裏町に入ると洗濯物の滴が上から降つてきて何となく落着かないが、夕方、このように町はずれの海岸沿いに出ると静かで美しい。

翌日、私はナポリから船に乗つてカプリへ行つた。左手に遠く出ているのがソレントのある岬だ。前にボンペイからアマルフィを経てこのソレントへも行つたことがある。アマルフィへの道

は屈曲し、深い断崖にも花が咲き、その下は恐ろしいような青みをたたえた入江がある。漁船がつどう小さな港は絵画的な白い家々がかたまつて陽を受けている。

アマルフィは中世の頃ヴェネツィアやジェノヴァとともに地中海を経て中近東とアフリカにつながる貿易の重要な港だった。町の建物にはイスラムを思わせる古い塔があり、ホテルに変わったカプチン派の修道院もある。十一世紀にここで羅針盤が発明され、また造船所も多くのガレー船をつくり出していた。しかしそうした繁栄の傍（そば）は今、ほとんどない。この町から岬の方へゆくとソレントである。船から眺めると、高い断崖が光を受けて白くかがやいている。その上に別荘や小綺麗なホテルが並んでいた。陸からゆくと庭園があちこちにあつて華やかに美しい町だ。オレンジやレモンの樹々が町を彩る。ここからも、ヴェスヴィオ火山がのぞまれるのであった。

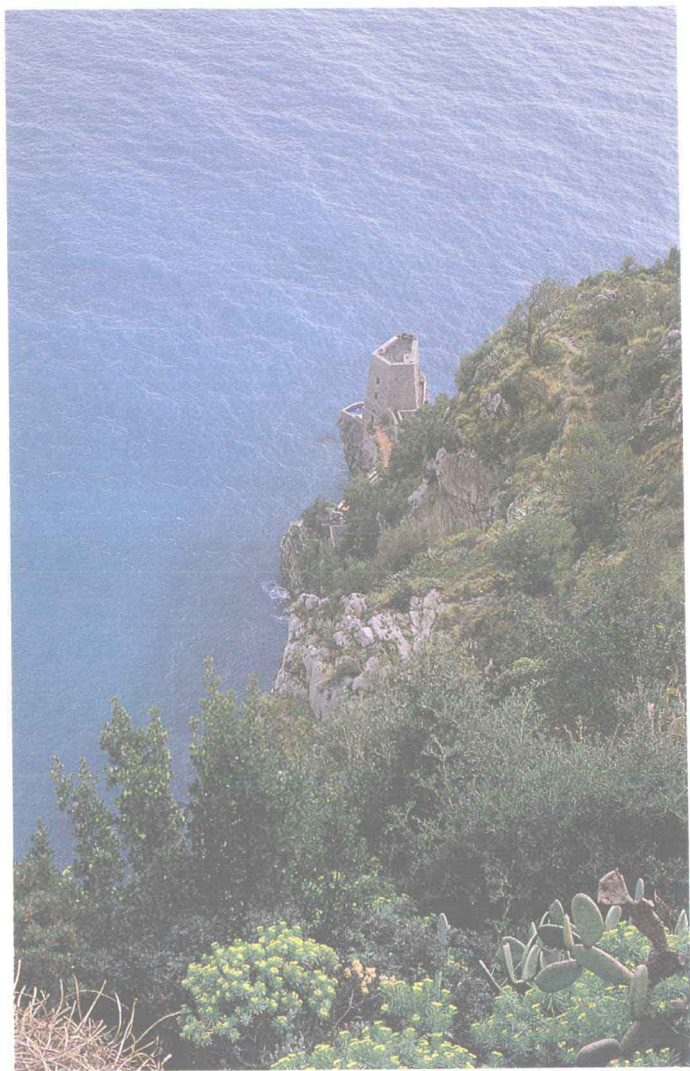
このような風光を前にしていると、「この世の歓び」という言葉が自然と出てくるから不思議である。地中海は人を無限に惹きつけるものがあり、ソレントやカプリでは北欧やドイツから、はじめはただ旅行に來ただけだった人々が生涯住みついたという話をよく耳にする。北のヨーロッパの禁欲的な思考から解放され、内なるへ自然は、身体から心にささやく。「生はただ一度、それを限りなくたのしみ、享受せよ」と。たとえば十八世紀ナポリの、D・カウデオゾの手になる『マンドリン協奏曲』などを聴くと、心が浮き立ち、南イタリアの「光」がそのままに心に入ってきて精神の心地よい陶酔を誘うのである。モーツァルトがナポリへ来て、「生きる歓び」と快楽を目の当りにし、「オペラ・ブッフア」を自らのものとしたことも理解できる。ここでは何よりも太陽があり、生を単純にし、無一物を苦にしないような感覚を育ててくれるのだ。

その点では同じイタリアでもヴェネツィアは違う。「生きる歓び」という点では等しいが、ナポリほどに太陽はない。ヴェネツィアの官能には自覚的で、意識的なエロチスムがあり、この町では空と海の間位置しながらも、ときには夜のゴンドラに揺られて愛し合い、室内のオリエンタリズムに飾られる夢想の空間に魅せられる。広場カンポと暗い露地が、まるで「光」と「影」のように「生きる歓び」の陰翳ニヤシスをつくるのである。

「ナポリは楽園である。人は、みな忘我の一種の陶酔の思いで暮している。私もやはり同じで、ほとんど自分というものが分らない。まったく違った人間になったような気がする。『お前は今まで気が狂っていたのだ。そうでなければ、現在気が狂っているのだ』と昨日私は考えた」（ゲーテ『イタリア紀行』）

この地に来て「人々が何と言おうが、また絵に描こうが、この風光の美しさはすべてを超えている」と人一倍感受性のつよいゲーテのこの感動を割引いても、ナポリ湾から見るこの風光は見事である。ゲーテとともに、どこを見渡しても岩山ばかりで、恐ろしく冬は寒い陰鬱なグルノーブルに生れたスタンダールが終生イタリアを愛したことを思い出し、海の微風と太陽の光を感じているうちに私はカプリ島に着いた。

濃い藍をたたえた海にかこまれて、この島は「時の外」にあるような古代的な明るさをたたえている。風と光がみち、家々の影は深い。私は別荘、サン・ミケーレを目指した。白い星のようなミルトの花、銀緑のオリヴ、暗緑の糸杉や黄色のはりえにしだ等がアクセントをつける坂と石の階段を辿ってのぼる。ローマ皇帝アウグストスはこの島に晩年の日々をすごした。力と意志



アマルフィの海岸

と明敏さを備えた彼も、この島でそうした政治の決断力とは別に、詩をつくり、たえず冗談を言い、かがやくこの風光を愛したという。だが、同じローマ皇帝でもティベリウスは違った。最初三十六歳のときにギリシャのロードス島に隠棲している。彼の生涯は暗い。最初の妻とはアウグストスの命令で余儀なく別れ、皇帝の娘、ユーリアと結婚する。しかも皇帝になったのはやっと五十六歳になってからであつた。彼は最初の妻との間に生れた息子を亡くし、六十五歳になってこのカプリに隠棲したのである。晩年は占師にかこまれながらすごしたという。この島は対照的な二人の皇帝の生を抱いて古代の時を閉じる。やがてイスラムが、そしてノルマンの海賊があとをおそう。地中海の多くの島々がそれを経験したように。島の頂近くには、アクセル・ムンテの建てたサン・ミケレの豪華な別荘がある。ここはまさに眺望絶佳というほかはない。三百二十五メートルの高みにあり、空と島の間生き、南欧の花と野生の鳥たちの啼き声にかこまれ、さへぎるものの何一つない海の彼方にナポリ湾がのぞまれるのである。

ムンテは一八五七年に生れ、一九四九年、九十二歳で世を去つた。彼はスウェーデンから十七歳のときにはじめてカプリに來た。一八七四年のことである。そのときの太陽のかがやきを終生忘れたことはなかつたという。二十三歳でパリ大学医学部を卒業し、医者としてパリとローマで成功し、一九〇三年にはスウェーデン王室の、特にヴィクトリア女王付の医者となつた。他方、一八八五年來、彼はビュックというペンネームで作家となり、一九二九年には大ベストセラーの『サン・ミケレ物語』をかいだ。彼は二度結婚しているが、一九〇七年の若いイギリス女性との結婚から二人の息子が生まれている。彼はこのサン・ミケレの別荘で多くの時をすごした。し

かし一九一〇年以降、眼を病んでやがて失明し、一九四三年には永遠にカプリを離れている。一九四九年、ストックホルムの王宮で亡くなったが、最後の六年間は王室の客人としてすごしたという。彼は、

「私は私の家が、まるでギリシャの神殿のように太陽と風と海と光に開かれているように願う！光よ、お光よ！」とかいている。まさにその通りの場所に中世イタリアとルネサンス様式を巧みに折衷した白亜の建物が、糸杉にかこまれ、青い空を目指して立っているのである。

「私はこの家を太陽の聖所のように、膝づきながら建てたのだ」とも彼は言う。「光」にかけてその「知」の教えをそこに汲み尽そうと彼は願ったのであろう。それだけ「光」を愛した彼が失明するとは皮肉なものだが、北のヨーロッパ人の地中海に対する無限の希求をこれほどよく示すものはない。ムンテは実に数多くの古代の遺品、中世の家具等を、地中海のほとりからここに集めたのである。そのおののちに歴史があり、彼の思い出がからまっている。

入口の扉は濃褐色の古い中世のものだが、そのまわりの白い半円アーチをもつ装飾は、中世イタリアの教会扉口と同じく、巧緻な動物文様が植物文様の間に刻まれている。この扉を押して入れば、白い空間が広がり、目につくものといえば緑の蔓がからむ壁にはめこまれている石棺彫刻の三つの人像である。それはローマ時代のものという。足元のモザイクはポンペイ渡りのものでそこに犬の絵が描かれているが、かつて貴族の玄関で「猛犬注意」<sup>カウエ・カネム</sup>のためにつくられたものという。この白い空間にも「光」が溢れて美しい。

食堂にはルネサンス様式の家具にイタリアとスウェーデンの皿や食器類があり、民俗的な印象

がつよい。しかしこの別荘でもっとも典雅、豪奢で気品にみちたものは彼の寝室であろう。机があるから書斎としても使ったに違いない。十七、十八世紀様式の家具にかこまれたシチリア・ルネサンスの鉄製の寝台があり、書物棚スクレティルの上の壁には古代的な浮彫りがはめこまれている。天井を支える柱の一つはアフリカ産の色大理石であり、植物文様の柱頭彫刻がついている。それにムンテ自身が近くのマリナ・グランデの海からさがし出したというメドゥーサの彫刻が壁にある。おそらくローマ時代のものであろう。また海に向って開かれた窓の前の机の上には、さり気なくアフロディテの大理石の頭部がおかれてあった。これらの配置は絶妙な美意識のバランス感覚によって成り立っている。

「断行と望むこと、知ること、そして沈黙すること」とはムンテの銘だが、そのなかで特に彼は「知ること」に生涯をかけた。古代と中世、ルネサンスにかかわる「知」と美を彼は涉猟したのであり、その博搜精査がここに実を結んだといつてよい。

この典雅な部屋に続いて「ヴェネツィアの客間」といわれる通り、華やかで愉し気なヴェネツィアのロココ様式の家具があり、それに古代彫刻が不思議と釣合う。ここから海を眼下に見下す廊下に続き日蔭棚ベルゴラにかけては、古代の柱頭彫刻やモザイクのはめこんだ（ローマの）テーブル、それにシチリアの、とある農家が洗濯棚に使っていたのを見つけ、もちかえった修道院祭壇のテーブル等がおかれている。その間に若き日のティベリウス皇帝の大理石の胸像もある。なおも希望と夢にみちていた時代の倅もがが漂うものだ。しかしおそらく壮年の頃には、「ウェヌスの宵空」にあった次のような詩句と同じ心をいだいていたのではなからうか。